

社会科教科論

社会科部

1 教科等の本質

平成 29 年度告示の学習指導要領において、社会科の目標は「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、(広い視野に立ち、) グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成すること」と示されている。この目標の中心は「公民としての資質・能力の基礎(以下、公民的資質)」を育てることであり、それは単なる知識の伝達にとどまらず、子どもたちが「よりよい社会の形成者」として成長することをめざす学びである。社会科の使命は、社会的事象を多面的・多角的に考察する営みを通じて、自らの価値や知識を創造し、社会参画へとつなげることにある。

人類は長い歴史の中で、「社会」というものを客観的に意識し、さまざまな視点や方法でとらえ、理解してきた。「社会とは何か」「この社会はどのように成り立ち、動いているのか」「その動きを生み出しているものは何か」「それをどうすれば変えられるのか」こうした問いを重ねてきた歩みこそが、「社会の研究の歩み」であり、人類の文化の核心でもある。この観点に立てば、社会科の学びとは、人・自然・組織の三者、そしてそれらが時間的・歴史的に変化していく「動き」の四者の関係を追究していく営みだといえる。ホッブズ、ロックらの社会科学の先哲たちの思索もまた、この四者の関係をどのように理解し、変えていくかという問いに対する試みであった。つまり、社会科とは「社会を知る」ための学びであると同時に、「社会をつくり変えていく文化を継承・創造する学び」でもある。

これらを授業で考えてみると、社会的事象を多面的・多角的に考察する過程を重視することが重要である。言い換えれば、義務教育段階の社会科では、一つの社会的事象を様々な立場から捉えられるようにすることが大切である。制度や歴史を「唯一の正解」として扱うのではなく、異なる視点や背景に気付かせることで、社会の見方を広げることができる。この営みこそが社会科の本質であり、子どもたちが未来の社会に責任をもち、主体的に生きる力を育む土台となる。

これらを踏まえ、本校教科部では、社会科の本質を「社会の見方を広げること」ととらえている。それは、自分の立場だけでなく、他者の視点や異なる価値観に立って考えることにつながる。社会を一つの正解としてではなく、多様な見方が交わる「対話の場」としてとらえるとき、学びは新たな意味をもち始める。学級という小さな社会において、課題解決に向けて民主的な対話を重ね、合意形成を図る経験を通して、子どもたちは事象の関連や背景を理解し、新たな知識や価値を創造していく。そこで得られる「よりよい価値」と「確かな知識」は、主体的に社会と関わり、よりよい社会を構想していくための基盤となる。したがって、社会科の学びとは、生徒一人ひとりが社会の捉え方を広げながら、新たな価値を創造し続ける営みであり、未来の公共を共に築く力を育む学びである。

これらの資質・能力を育むためにも、社会科における「本質的な問い」とは、単なる知識の確認や正解を問う設問ではなく、「社会の構造や制度、歴史的背景の意味を根本から問い直し、自分ごととして向き合えるような問い」を指す。このような問いは、学習者が自らの価値観や経験と結びつけて考え、判断し、対話しながら深めていくことができるものであり、学びの出発点となる。このようにして、課題を追究していく過程で、他者と協働しながら民主的に活動を行うことで、シティズンシップを発揮し、「よりよい未来」を創る基盤である力が育まれると考えた。

2 社会科での四つの学習活動

社会科では、四つの学習活動を整理したものが以下の表である。

ためし	○特色（概念）を見出す時間 ・獲得した知識を基に、特色（概念）を整理する ・背景にある価値や前提を問い直し、既存の見方に揺さぶりをかける
みがき	○課題を解決するための情報を収集する時間 ・立てた問いに対して、資料やデータをもとに仮説的に考察する時間 ・多様な立場や文脈から課題を捉え直し、他者との視座の違いに目を向ける
さぐり	○本質的な課題に対して自分の考えをもつ時間 ・時代が変化する要因について自分の考えを形成する
つなぎ	○それぞれの活動や学習を通して気付いたことを共有し、協働的に学ぶ時間 ・「さぐり」で考えたことを共有し、合意形成を目指す時間 ・探究を振り返り、次の学びにどうつなげるかを展望する

今回は、歴史的分野を参考に、四つの学習活動の意図について紹介する。

歴史的分野における探究的な学びは、過去の事象や制度を単なる知識としてではなく、「今を問う視点」から捉え直し、現代社会の構造や価値を批判的に考察することを目的とする。そのためには、学習の中に思考の段階を意識的に設計し、子どもたちが問い直し、構築し、他者と共有する営みとして歴史を捉える必要がある。このような思考を深める営みは、次の4つの学習活動を循環的に位置づけることによって支えられる。「みがき」では、立てた問いに対して、資料や多様な立場の記録をもとに仮説的に考察を進める。ここでは、異なる視点から歴史を読み解くことが求められ、事実の単なる収集ではなく、背景・構造・影響を多角的に分析する力が養われる。この段階で、思考の射程が「一つの出来事」から「社会の仕組み」「権力構造」「文化的価値観」へと広がっていく。そして「さぐり」では、分析を踏まえながら、歴史の変化や持続の意味、そこに作用した要因を総合的に考察し、自らの立場を構築する。この段階では、歴史的事象を通して「社会はなぜ変わるのか」「私たちはどう変えうるのか」といった本質的な問いへと思考が深まっていく。ここにおいて歴史は、未来を構想する素材として位置づけられる。「つなぎ」では、それぞれが築いた考えを持ち寄り、他者の視点とすり合わせながら、共に歴史の意味を再構築する。異なる解釈が交錯する中で、合意形成を試みたり、自分の視座を相対化したりすることで、思考の幅が広がる。さらに、このプロセスを通して、歴史的学びが現代社会や自身の生き方とどう関わるかを展望し、次の探究へとつなげていくことができる。「ためし」では、獲得した知識をもとに時代の特色を捉えるとともに、当時の人々にとって“当たり前”とされていた価値観や制度に対して、違和感や疑問をもつことが重視される。ここで求められるのは、過去の社会の構造や人々の選択を「自明なもの」とせず、「なぜそうなったのか」「他の可能性はなかったのか」と問い直す力である。これは、歴史を一つの解釈や物語として再構成し、今の自分と社会を相対化する第一歩とすることができるだろう。

3 引用・参考文献

- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」
- ・文部科学省（2018）「中学校学習指導要領」
- ・渡部竜也（2020）『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書
- ・日本教科教育学会（2020）『教科とその本質』教育出版
- ・棚橋健治、木村博一（2022）『社会科重要用語辞典』明治図書
- ・奈須正裕（2023）『資質・能力と学びのメカニズム』東洋館出版社